

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18760461
 研究課題名 (和文) 大阪における人々の嗜好性が生む都市景観に関する研究 ～他都市との比較を事例として～
 研究課題名 (英文) A comparative study of urban landscape caused by people's preferences : Osaka and other cities
 研究代表者：
 花村 周寛 (HANAMURA CHIKAHIRO)
 大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・特任助教
 研究者番号：00420430

研究成果の概要：

本研究で実施した海外調査事例を整理し、そこから都市の形成と個人の嗜好性についての関連を整理するとともに、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターが、大阪の中心地中之島で実施した中之島コミュニケーションカフェについて、参与観察を行った。

同時に調査で訪れた都市を比較考察している。ラスベガスのように、資本主義経済が発展していく段階で形成された都市が未だに都市景観の骨格がマクロな構造に支配されているのに比べて、サンタクルーズなどで見られるように物語復興として個人同士の対話をベースに町づくりが進められた事例や、ミュンスター、カッセル、ヴェネチアなどでもアートを媒介にした町づくりが見られるが、個人的な表現や個人同士の対話が都市を形成している事例が今後大阪で展開される事は追って調査する必要があることが明らかになった。

アメリカや日本、欧州で多く見られるように既に都市の成熟期に入っている地域ではそうした個人の表現行為や対話が有効化し得るかもしれないことが明らかになってきたが、一方でアジアを中心にしたまだ開発途上の都市では国家レベルで行われる都市開発が多く見られ、その結果が都市景観の形成についてどのような影響を及ぼすのかということは、グローバルとローカルのスタンダードを探る本研究においては重要な視点であり、アジアの都市開発事例を現地調査し、その結果を研究成果に反映させるべく整理中である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000		1,200,000
2007 年度	1,200,000		1,200,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	330,000	3,830,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：都市計画・建築計画

キーワード：景観計画

1. 研究開始当初の背景

今世紀は都市の時代と言われ、その中でも集客都市という言葉からも伺えるように、都市の個性化が求められている。高度経済成長期やバブル期の開発で都市景観は一新され、全国各地が軒並み均一化された風景となったと言われる中、今後はますますその土地に根ざした都市の個性化が求められる。その中でも特に大阪における研究が遅れているのが現状である。

本研究者は2000年より継続的に大阪における都市の個性化についての研究を行って来た。まず水の都として活況を呈していた江戸末期の大阪の風景を表した名所絵図「浪花百景」と、現代の観光名所とを比較考察する事で、今の大阪の景観における問題点を探った。その結果、江戸期は地形や河川のエッジといった部分に名所が集中していることが分かり、都市の構造が自然によって規定されていることが分かるが、現在ではキタとミナミに名所が集中し、都市構造が交通網によって形作られていることが明らかになった。また名所を構成するエレメントについても江戸期の方が自然物から人工物まで名所として楽しまれていた事に対して、現在ではそのほとんどが人工物となっていること、また眺めについても眺望するものと内部に入り込んで楽しむもの、またその両方を併せ持つものが江戸期では担保されていたことに対して、現在はそのほとんどが内部に入り込むタイプの名所であり、眺めの多様性についても失われていることが明らかになった。

ではなぜ江戸期で観られた個性を呈していた大阪の景観が現在では失われてしまったのかを探るべく、明治元年から平成13年までの大阪の都市構造と運河についての変遷を交通・防災・都市活動・祭り・環境対策の視点からトレースし、個性がいつどのような理由から失われたのかを2002年に探った。その結果、水運を利用した物流システムが廃止された事、戦災復興の際に瓦礫の処分場として運河が利用されたこと、また度重なる水害の進上路となっていたことから高い防潮堤が立てられた事、大規模な道路建設の必要性が生じたことなどの様々な要因が合わさり、運河が戦後埋め立てられてしまったことが、都市構造を大きく変化させる要因になっていることが明らかになった。

現在の大阪の個性が運河に寄ってなりたつものではなく、キタやミナミを中心とした人工物によって創出されているのであれば、今後の景観整備の方向性を占う上でも、現状で都市の個性を呈している風景を探る必要があるという問題意識から、パブリックスペースにおける個性的な人のたたずまいについて2003年からフィールドワークを50人ほど

の学生とともにいった。

そこで発見されたのは、大阪の個性の一つを担っているのは、公共空間に対して個人的な関わりを見いだしている風景の事例であり、それは行政が建築家やランドスケープデザイナーに依頼して建設した場所ではないようなところで多く見る事が出来た。また現行の法制度で定められている利用法とは異なる利用のされ方をしている事例の中に、都市とそこで暮らす人々の個性が反映されているケースが多く観られた。

以上のように継続して大阪というフィールドを対象にして都市の個性化という側面から研究を続けて来たが、これからの大阪の個性化ひいては都市の個性化ということを考える上で、建設の時代が落ち着きを見せ始めた中では、行政自治体が提示するマクロなシステムや、あるいは資本が投資することで生み出される場所が都市の個性化を進めて行く事にはもはや限界があり、個人や嗜好性を同じくする人々同士が共有する風景というのを探っていく必要があることが分かる。それが本研究の出発点である。

2. 研究の目的

従来までの政治的なマクロなシステムとは別種の構造である、個人や嗜好性を同じくする個の集合が都市景観を変える力を持ち始めていることがこれまでの研究の結果より指摘されている。

東京では森川らが行った調査によると、秋葉原と渋谷では行き交う人々に趣味や嗜好の違いが見られ、それが都市の景観を生み出す上で一つの重要な要因になっていることが指摘されている。その際に重要なポイントとしてはそうした趣味の構造が建築のファサードやパブリックスペースのデザインにまで影響を及ぼしているという事である。個人的な嗜好性が共有されそれが集合する事でパブリックスペースのあり方を左右するという事は、その共有された嗜好についての分析を行う事が必要不可欠であることへの視座がこの研究では見られる。

翻って研究が遅れている大阪の今後の景観整備の方向性を考える際にもそうしたグループダイナミクスの観点から衣服や持ち物、振る舞いなど嗜好性を同じくするグループとその規範について調査を行い分類考察するとともに、それらのグループが出入りする場所や施設との関係性を明らかにする必要がある。さらにそうした現象が東京でみられるのと同じ構造であるのか、あるいは大阪固有の景観であるのか、もしくはグローバルに見られる現象なのかを探るため、メディア調査および海外現地調査を含めた他都市との比較の中で考察を進めることを目的とした。

同時に、実際の空間において趣味や嗜好性を同じくする個人に向けたイベントを行うことで、そこで考察された事との関係をさぐる実証実験とすることを旨とした。

3. 研究の方法

大阪の状況を把握するためにはこれまでに行ってきた大阪の現地調査をまとめ、そこから大阪に見られる趣味や嗜好性と都市空間との関係性についての考察を行う。写真記録や映像記録を用いたビジュアル的な把握と地図を用いた空間的な把握をオーバーレイすることでそれを進める。

またそれがグローバルな現象なのかどうかを知るために、国内外の都市開発の状況をレポートした国内、海外書籍、文献を収集調査し、同じような状況が見られる都市やまた文化や歴史的背景が全く異なる都市など比較対象としてふさわしい場所を選定し、その都市で見られる個人の嗜好性と都市空間との関係について写真記録などを用いた現地調査及び地図などを用いた空間把握及び、地元メディアも含めた文献調査を行う。

最期にそれらの都市調査の結果と大阪における状況との比較考察を行い、その違いや類似点を浮き彫りにすることで、大阪の個性化に向けた都市整備の方向性について比較検討考察する。

それと平行して、大阪市内や大学キャンパス内で都市の個性化に関係するようなイベントを行い、そこで実施検証するという方法も検討した。

4. 研究成果

本研究で実施した海外調査事例とメディア解析について整理する中で、個人の嗜好性について明らかになりつつあるのは、特に若年層については歴史的背景のある文化を基礎にしつつもそれを近代化以降のグローバル文化の中での価値観が個人の趣味や嗜好をかたどっており、その視点から歴史的な価値を再解釈しているのではないかとこの仮説が浮かび上がった。

一方で、ラスベガスのように、資本主義経済が発展していく段階で歴史的な価値観を考慮せず、根こそぎ土地の文脈を消去し形成された都市が未だに都市景観の骨格がマクロな構造に支配されている状況も個性を形成していると言えることが調査により明らかになったが、この開発手法は現在の日本における開発の文脈や論理に適合せず、この方向性で個性化を模索する事は難しいと考えられる。

一方で、サンタクルーズなどで見られるように物語復興として個人同士の対話をベースに町づくりが進められた事例や、ミュンスター、カッセル、ヴェネチアなどでもアートを媒介

にした町づくりが見られることが調査で明らかになったが、個人的な表現や個人同士の対話が都市を形成している事例のように小さな対話や場所から街を徐々に再編していくという方法が大阪においては有効であるのではないかと考えられる。

総じて見た時に、アメリカや日本、欧州で多く見られるように既に都市の成熟期に入っている地域ではそうした個人の表現行為や対話が有効化し得るかもしれないことが明らかになってきたが、一方でアジアを中心にしたまだ開発途上の都市では国家レベルで行われる都市開発が多く見られ、その結果が都市景観の形成についてどのような影響を及ぼすのかということは、グローバルとローカルのスタンダードを探る本研究においては重要な視点であり、アジアの都市開発事例を現地調査し、その結果を研究成果に反映させるべく整理中である。

その中で一つ考察の焦点として考えられるのが、都市空間の中に積み上げられてきた歴史的な文脈のある場所に、現代的なグローバルカルチャーの価値観が上書きされて、多様な年齢層を受け入れる価値が一つの場所に同居していることが都市の個性化にとって必要なことであるのではないかとこのことである。

例えば、大阪で言うと中央公会堂などの歴史的に価値を持つ建物がある中之島界隈のような文化エリアに水辺ナイトのようなイベントが催され、歴史的な文脈から出て来たわけではない価値観が上塗りされることで、若者から高齢者まで関われにぎわうスポットに成る可能性を秘めている。また上海の田子房の開発に見られるように、ローカルな住宅地であった場所がその空間性を活かした形でアートや文化の発信地として注目を集めつつあるのも、同様な現象であり、そこで見られる嗜好性自体は明らかにグローバルカルチャーの影響を受けているのだが、それがローカルな空間性と合わさり、上海の個性を形成する一つのスポットとなっていることが分かる。

このように、ローカルな状況の中にグローバルな状況が入って来て、それが合わさり一つの価値を形成するという事が都市の個性化にとって有効に働いているという事が伺えるが、その際にかつての巨大資本による開発のようにローカルな文脈を根こそぎ剥ぎ取ってしまうことはかえってその個性を削ぎ取ることになってしまう。

昨今の現代アートにも見られるようにその土地を活かした敷地主義（サイトスペシフィック）な開発とグローバルなセンスの両方が不可欠であるということが考察出来る。

そのような見地から、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターが、大阪の中心地中之島で実施した中之島コミュニケーションカフェについても、実際の企画運営や空間作

りに携わりながら参与観察を行った。
そこでは、ミュンスターのように現代アートを主軸にしなが、人々の対話空間を中之島のような歴史的な文脈のある場所にうみだしていくということが目指されており、ともに3日間のイベントではあったが、2006年の実施で約1700人、2007年の実施で約2200人の来場者を迎えた。このことから嗜好性をともにする個人がそうしたスポットが生まれる事で少なからず関心を持ちそれが個性化を押し進める一つの要因になることが明らかになっている。

また、大学キャンパス内においても個性的な風景を個人の視点から捉え直すデータハンダイというプロジェクトを継続的に行っている。これは個人の集団が多様な価値観から大学の個性を発見し、それを収集し、流通させて行くという一連のプロジェクトで、活動に参加した学生メンバーのみならず、その活動が生み出すグラフィックなどのアウトプットに触れた人々も大学というローカルな場所の価値を再解釈するという効果が見られ、今後も継続して研究と実践における参与観察を行って行く予定である。

このように都市の個性化にとって歴史的な文脈が既に降り積もった土地の価値を、現代的なグローバルな感性で再解釈することが重要であり、そのためには都市に関わる人々がどのような視点を持つのかについてより詳しい調査を今後行う必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

花村周寛、本間直樹、清水良介、関嘉寛、小林仁、風景を実践する データハンダイと媒介のデザイン、「コミュニケーションデザイン」(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター紀要論文) vol11, pp60-pp81, 2008年、査読有

[学会発表] (計1件)

平成20年度造園学会関西支部大会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花村 周寛 (HANAMURA CHIKAHIRO)
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・特任助教
研究者番号：00420430

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：